〈創立十五周年記念特別講演〉

奴隷の学問をのり超えて

――比較思想における挫折と実現――

中村　元

我々のこの比較思想学会もいつの間にか十五周年を経過するようになりまして、本日その十五周年記念の学術大会が開かれますことは、まことに御同慶の至りと存じます。

出発当時は、志を同じくされた方々が集まられただけでして、十数人も集まりましたでしょうか。それが、学会として発展するようになるとは、その時には夢にも思いませんでした。ところが、いつの間にか、皆さまのご熱意が高まりまして、やがて学会が組織され、社会的にも認められて、その事業が着々と発展しました。会員ももう千人になんなんとしていることを聞きまして、まことに喜びに堪えないのであります。

以前もこの学会で私は公開講演をしたことがございますが、このたび、十五周年となりまして、また、押し切られたわけであります。が、しかし、考えてみますと、ああ、また同じような講演をするんじゃ、皆さんはうんざりなされると思われましたので、刺激的なタイトルに変えて頂きました。

私は、前にこの学会で、こういうことを申し上げました。

「この学問の進展はなかなか容易ではない。余程の覚悟がいる。だから私は一番槍になる覚悟でございます」

と。それを聞かれたある大学教授（故人）の方が感心されまして手紙を下さいました。「あなたの一本槍宣言に大いに感動した」と。

しかし、一番槍と一本槍では大変意味が違うのであります。一番槍と申しますのは、昔の城攻めの時に、真っ先に駆けて行って矢を集中的に受けまして、一番槍は必ず先に死ぬはずなんです。それによって、向こうの城の陥落ができるわけです。

ところが、それと比べた場合、一本槍というのは、私が一人た

わごとを言っていると、誰も聞く人もいなければ、ついてくる人もいないと、それでも一本、槍を持って進んで行くと、そういう意味に取られたらしいんですね。それが或いは当時の情勢をありのままに伝えていたかと思うんですが……。

ところが、皆さまのご協力によりまして、学会がこれだけ発展いたしますと、もう一本槍ではなくて、私は一番槍の名誉を讃えて頂き、立派な槍持ちだけでも千人近くいるということで、大変なことだと思います。

特に今回は記念すべき大会でございますので、私は、老人として今は亡き先輩に対する感謝を述べ、それから私だけが知っていることでも、この際、お伝えしておく方が将来何かのお役に立つことでもあればと思って、そういう点を中心にして述べさせて頂こうかと思います。

皆さまの眠気覚ましのためにこのような刺激的なタイトルをつけましたけれど、これは決して理由の無いことではないんですね。

例えば、韓国の学者たちが集まった所で、たまたま日本の学問のことに触れますと、「うわあっ、日本の学問は注釈・注釈だなぁ」って言うんですよ。というのは日本の学者は何をしているかというと、注釈ばかりやっているんです。ところが、韓国の学者はとにかく自分の実になるような学問をしたいと思っている。そこに大きな食い違いがある。

海を遠く越えましてアメリカへ行きますと、アメリカの哲学者たちは、日本に来てみると「わぁ、驚いたねえ、ヘーゲルのフォッシル（化石）がまだいるよ」と言うんですね。なるほど、向こうでは遠く越えてしまったのに、こっちではまだそこに拘わっている、という意味でございます。

いろいろ思い出しますが、感謝と追憶の気持を込めて思い出すままに申し上げます。

歴史家に亀井高孝という第一高等学校の先生がいらっしゃいました。この先生は東西の文化交流を研究なさいまして、専門は西洋史だったので、例えば、平家物語のキリシタン天草本というポルトガルの文字で書かれたものを日本の文字に直すとか、大黒屋光太夫のロシア放浪の経過とか、実に特異な研究成果を出された方であります。

〔東西文化交流に関する亀井先生の業績としては『キリシタン版天草本平家物語』（Feiqe Monogatari）を写真版で刊行され、また『ハビヤン抄　キリシタン版平家物語』を令嬢阪田雪子さんとの協力により翻字出版された（再刊、吉川弘文館、昭和四一年）。十八世紀の末にロシアに漂流した光太夫に関する研究としては『北槎聞略』（吉川弘文館、昭和四〇年）を主資料として、東西の諸資料を渉猟して『大黒屋光太夫』（吉川弘文館、昭和三九年）をまとめられ、また『光太夫の悲恋』（吉川弘文館、昭和四二年）のような書ものされた。研究の完成のためには、昭和四〇年には齢八十余歳にしてロシアのモスクワへ旅をしておられる。東西を兼ねて熟知している人でなければできない研究である。〕

私も個人的に大層お世話になり、ご指導に預かった方でござい

ましたが、その先生のところに、私が大学に入りましてまもなくご挨拶に伺いました。そうすると、先生はこうおっしゃるんですね。「君、大学の講義を聞いてみて失望しなかったかい？」。私としては先生にお世話になり大学に入ってやってきているのに、「失望しました」と言えないんですね。「いや、そんなことはございません」と反射的に答えたものでございます。

それが今から五十年以上前のことですね。それから自分で考えたんですがね。これは昔の話ではない。私は東大の教壇で講座を汚しておりましたが、「ああ、この私の講義を聞いた人にも、先輩が同じような質問を向けたんではないか。——あの中村という教師がいるそうだけれども、失望しなかったかい？」と。そう思いますと、私は冷汗が出ましてね、どうも皆さまの前に立っているというのが、何か晒し者になっているような、或いは学者の間の人民裁判にかかっているような、そんな思いもするわけでございます。

日本における学界のあり方について、既に反省すべきであるという声は、やはり五十年位前から私は耳にしていたのであります。このことをお伝えしてよいかどうか、私はちょっとこの瞬間まで躊躇していたのですが、敢えて申し上げます。

私はインド哲学を専攻致しましたが、その方面の特に屹立する立派な指導者であられました宇井伯寿先生や金倉円照先生などに、私は公私とも大変ご指導ご厚誼に預かり、何とかその先蹤にあやかりたい、と思っていたのでございます。また、金倉博士はインド哲学の研究者の中では比較思想研究に特に理解を持っておられた方じゃないかと思います。そういう意味でも私は尊敬申し上げていた。

〔比較思想の方面で金倉博士の注目すべき論文は「インドの哲学と西洋の思想」（金倉円照著『インド哲学仏教学研究』〔Ⅲ〕、春秋社、昭和五一年三月、三七五—三九四ページ）である。〕

ところで、わが国のインド哲学研究の正統派の態度についても批評がなされていました。博士に一番近いご親戚の方で江上利生師という方がいらっしゃいました〔浄土真宗本願寺派の住職〕。ご親戚の仲の良いことは羨ましいばかりでありましたが、この方は東大の倫理学を出られ、鹿児島県の教育委員もなさった。

お元気で活動していらっしゃったときに、一言インド哲学の研究のあり方について私にこういうことをおっしゃったんです。

「金倉のようなインド哲学の研究をしないで、もっと生きた研究をしてくださいよ」

と。何か耳にしてはならないことを耳にしたような気がしまして、それで敢えて江上さんに詳しくお尋ねするだけの勇気がなかったのです。それっきりになりました。

日本におけるインド哲学の研究の主流に対する反省、批判が、同じ時代のほぼ同年齢の方の間からも現われていた。

考えてみますと、私は昔の大先輩の指導に応えるだけの研究を

してはいないし、また、批判の意志表示をされた方の趣旨もどうも充分に生かせなかった。老残の身を晒し、まことに我ながら残念だと思うのであります。

〔恐らく宇井博士、金倉博士など諸先学の研究は、全部生かさるべきである。ただそれをどういうかたちで生かすか、ということは、後学に課せられた〈公案〉であろう。〕

そこで自分は自分なりにいろいろ考えるのでございます。じゃあ、外国の人はどう評価したか。ハワイ大学のチャールズ・A・ムーア教授を中心として「東西哲学者会議」が開かれました。欧米からもアジアの諸国からも盛んに招待を受けて向こうへ行って研究発表を大勢の学者がされたのでございますが、その時にアメリカの二、三の学者、殊にシドニー・フックという鋭い学者はこう批評を下したのです。

「日本の学者の研究発表は大変いい。それはインフォーマティブである」

これは褒めたつもりで言われた言葉であります。しかし、考えてみますと、私は胸を突き刺された気持になりましたね。

というのは、中華民国から来た学者は頭は古いかもしれないが、ひとつの伝統を持っているんですよ。それで、アメリカの真ん中へ出かけても、「フィリアル・パイアティー（孝）」ということを盛んに言うんですね。

インドからもいろいろな学者が来ましたけれども、マハーデーヴァンという学者は、まるで今から千三百年前のシャンカラの時代の生まれ変わりみたいな学者でして、インドの精神的伝統というものに絶大な自信を持っているんですね。それで、そればかり言うんです。いくらアメリカ人から叩かれても、びくともしない。

〔特に第三回の東西哲学者会議については、尨大な報告書が刊行されている。Charles A. Moore (ed.): *Philosophy and Culture East and West. East-West Philosophy in Practical Perspective.* Honolulu: University of Hawaii Press, 1962. それは四十四人の学者の発表の全文を掲載し、大版で八三一ページに達する。〕

ところがね、日本の学者は、まことに謙虚ですね。「どうか、インフォメーションを差し上げますから、それをよろしくこなしてください」という態度です。私自身もそうでした。日本の学者はどこまでも資料を提供する。それをこなして体系化して世界観をつくるというのは、これは向こうの人に任せる。そういう態度ですね。だからここにあげた「奴隷の学問」と言われても仕方がない。

つまり、日本の学者には自信がないということですね。では、日本人がすべて自信がなかったか。決してそうじゃない。いわゆる知識人と呼ばれている人々が自信がなかった。しかし、民衆に根ざして生きていた人、迫害にも抗した人というのは、ものすごい自信を持っていた。時には頑迷なまで。

西洋思想に対して批判的であった一つの例として私が感じます

のは、牧口常三郎です。創価学会の教義をつくった人ですね。実はなぜ私が注意するようになったかと申しますと、私の学生時代から、哲学とは新カント派の「真善美」、或いは「聖」を付け加えてですね、価値の体系を立てる。どの哲学者もその通り講義していて異論を挟む者がいなかった。

で、私は密かに考えてみたんですね。これらの諸々の価値は矛盾することがある。日本の古典を見ましても、これらの価値が矛盾するというような場合はいくらもある。

ところが、大学の哲学の先生は、そういうことには全然関係なく、ただヴィンデルバントとかリッケルトとかの言われたことをずうっと述べているわけです。それに対して反撃をくらわしたのが牧口常三郎なんですね。

そのことを知った時に私は驚いたんです。大体、「真善美聖」という価値の領域からですね、彼は「真」と「聖」とを除いて、そのほかに「利」を設定した。「利」というと利益を連想されますけれども、しかし、これはですね、案外、東洋哲学の核心に迫るものだと。仏教で一番大事にするものは何だというと、結局、「人のためを図る」「人のためになる」ということですね。

その「ために」というのをサンスクリット語で「アルタ(artha)」と申します。これを「利」と訳すこともあれば、「義」と訳すこともある。「利」と「義」じゃ違うと言われるかもしれませんけれど、両方の意味に関わる。人のためにもなり、それがまた自分のためにもなる、というところに一つの中心を置いているわけです。

私は牧口常三郎の思想を特に研究したこともなく、また評価することもできませんが、「人のためを図る」ということは仏教の基本精神であり、大切なことであると思います。ところが、日本の西洋哲学研究者は、そこまで思いをはせることがなかったのではないでしょうか。

牧口常三郎が何かそこに自分なりの統一を見いだそうとした。それは学問的には決して深くはないでしょう。ただそういう努力をしたというところには、自分で考える態度が見られるわけですね。だから、そこは自主的で、己が主人だったわけですね。ところが、残念なことには大学の諸先生は、西洋哲学に対してどこまでも隷属的な態度を取っていたのではないか。そこまで言ったら言い過ぎでしょうか。

で、考えてみますと、哲学の研究、或いは思想の研究というのは、わが国では非常に盛んに行なわれましたけれども、大体やっていることは叙述的です。どの本にどう書いてあるということを紹介する。そうして、わが国の学界は狭く、セクショナリズムで、細かに細分されておりましょう。その細分されたセクションの中でだけ見る。狭く細分された中でしかも外国のものを紹介するということだけになると、学問は結局文献学以外にないわけです。例えば、インド哲学の研究といっても、実際はインド哲学の文献学にほかならぬことになる。

さて、批判をする、或いは評定する、というようなことは、狭いセクショナリズムの立場からは実現しない。

決してすべての人がそうだったとは申しません。例えば、さっきの亀井先生の表現にまた戻りますけれども、私の『東洋人の思惟方法』は、もちろん評判は悪かったんですが、「誰それという大家がこう言っておられます」「ことに専門外にわたったのがいけない」というふうに亀井先生に申し上げましたら、「ああ、それは誰それの言うことは間違っているよ」と言われました。

セクショナリズムにとらわれないで、知識を求め、真実を目指すという志向はセクショナリズムを超えてしまう。ところが、いわゆる講座とか、学界の垣根というもので分けられて考えると、そういうことになってしまうんですね。

明治以降すべてそうだったとは思いません。明治の先輩は、非常に雄大なスケールをもって勉強していたと思います。その一例として、華厳とライプニッツの比較研究をした村上俊江という方があります。華厳の思想とライプニッツとは非常に似ているんです。——当然その違いはありますけれども。明治二十六年、日清戦争の前ですね。東大の卒業論文で。

〔村上俊江の論文「ライプニッツ氏と華厳宗」は、第二次世界大戦後に、ようやく刊行された。川田熊太郎監修・中村元編集『華厳思想』(法蔵館、昭和三五年二月)四五一—四八三ページ。いかにも明治の論文らしく、「ライプニッツ氏」となっている。

ちなみに土田杏村の卒業論文は『華厳哲学小論攷』(京都、内外出版株式会社、大正一一年)として刊行された。これは華厳思想を手がかりにして独自の思索を展開したものである。第二次世界大戦後に再刊された。〕

ところが、哲学的学問では、のちに細かな縄張り根性が支配するようになったものだから、もうそれ以後東大ではそんな卒業論文は出ません。私は三十年東大にいましたけれども、見かけなかった。

もとは、哲学的な学問をする人がお互いに集まって、協力するということが行なわれた。ところが、今日では、——この学会は別ですよ——それがなされていないんです。

これは、私だけが知っている事実でありまして、人には言わないで墓場に持って行こうかな、と思ったのですが、先年東大の文学部長室で、何か人事に関する相談だったと思います。哲学科の主任教授の岩崎武雄教授と中国哲学科の赤塚忠教授と私との三人がいました。三人とも高等学校からの同期で親しいのです。昔は哲学会というものが、いろいろな方面の人が集まって論文を出したり、仲良くやっていたものなんですが、ところがこの頃はどうもそういうことが無くて、とそこまで話がいきまして。

そうしたらあの温厚な赤塚君が突然、岩崎教授に向かってこう言うんですよ。

「それはね、あなた岩崎さんが我々を追い出したんですよ」

びっくりしましたね、あの温厚な学者が、面と向かってそんな

ことを言う。岩崎教授は「そんなことはないよ」と打ち消していましたが、これの判定は皆さんにお任せします。〔これについては、明治初期から現在に至る『哲学雑誌』の変遷を検討して頂きたい。〕

ただ明治時代には非常に研究者が雄大な広々とした気持で研究していた。いつの間にかセクショナリズムが支配するようになった、ということだけは疑えないことであります。

私の『東洋人の思惟方法』という本は専門の学者の間では評判が悪かった。ところが共鳴して飛び込んで来た人がいる。

その一人は、故・佐藤一郎君です。北海道大学の中国哲学の教授でしたね。あの人は中国哲学の研究室が面白くないというんで辞めて、インド哲学の私の研究室に飛び込んで来たんですね。

そんなことをしたもんですからね、専門家の間から干されてしまった。「けしからん奴だ」と。やくざの世界でもこっちの組を出てあっちに移ると干されちゃうでしょう（笑い）。

佐藤君は今度北海道大学を定年で辞めて名誉教授になり、東京へ来ましたので、私どもの寺子屋で講義をしてもらいました。しかし残念ながら突然急逝されました。私としては痛恨の至りです。〔昭和六二年三月三日逝去〕

〔北海道大学文学部中国哲学研究室で刊行されている『中哲通信』第9号（昭和六二年六月）が、「佐藤一郎先生追悼記念特集」となっている。〕

佐藤君は、「東洋哲学の研究というものが、学界一般の進展と歯車が合っていない」と言うんです。戦後すぐの時代の評言としては、非常に急進的なものだったと思います。そして、佐藤君の言われたことが、まんざら現在でも無意義ではないと思います。

その証拠には、日本の東洋学というのは、ことに漢学を主にした研究ですが、外の世界から隔絶して隔離されている。その証拠には「ジャーナル・オヴ・チャイニーズ・フィロソフィー」というのも着々と刊行され、また、今サンジエゴの大学の学者が中心になって「インターナショナル・アソシエーション・フォー・チャイニーズ・フィロソフィー」が機関誌を出しておりますが、日本人の名が出ていない。漢字の資料を扱う方で英文で書かれる方が非常に少ないんですね。

「外の学界と途絶してもいいじゃないか、もし勉強したいんならわしのところへ来い、教えてつかわす」とこういう態度の大家もおられるだろうと思うんですが、そういう態度でどこまでも通したならば、中国思想というものが、かつて啓蒙主義の時代にヴォルテールとかルソーだとか、それからライプニッツ、ああいう人々に強烈な刺激を与えたという感銘を、今の日本の東洋学者が与えられるかどうか。

もし、感銘を与えることができなければ、その学者の研究というのはたぶん、紙屑になってしまうんじゃないですか。

隔離されているということで、或るアメリカの哲学教授が私にこういうことを申しました。「日本の哲学者たちは不思議だなぁ。

あれだけ外の世界と交流がありながら、明治以後日本の哲学を英文で書いた人が一人もいない」

〔僅かに例外として、土田杏村が一九二七年(昭和二年)に Contemporary Thought of Japan and China をロンドンから刊行している。最近は外国文で著作する人も増えてきたから、将来は異るであろう。〕

「ああ、そうかな」と思って、「なるほどなぁ」と首をかしげたんですが。それは、英文で書けというのは、彼らの独り善がりだということは言えるかもしれないけれども、しかし、国際会議なんていうのはこの頃みんな英語でやられているという時勢でもありますと、やっぱり日本の思想的成果というものを英語で知らせ、彼らの批判に堪えるということだって必要じゃないでしょうか。

ところが、残念ながら、その動きは充分できていない。

しかし、熱心にされた方もおられたのです。

この比較思想学会の会員でありますが、蓮見俊光さんですね。あの方は外国に行ったり来たりして、まあ、放浪者みたいな生活をしておられた。外国語は、自由自在でした。著書もあったはずですが、晩年には結局日本で落ち着くことを希望しておられたのに、それが思うにまかせない。

最後には或る大学で教授の地位を得られたと思いますが、真冬の寒中に入院されまして、私に会いたいから来てくれと言われたのですがね。寒中に、行ったこともない病院へ行くということは老人には耐え難いものですから、ちょっと用心して、お見舞いに手紙を書いたんです。そうしたらその手紙が返ってきましてね。亡くなったのですね。

「ああ、悪かったなぁ」と思いました。が、私はやっぱり日本の哲学的な学問領域におけるセクショナリズムが大変災いをしていると思います。

〔蓮見俊光氏の著書としては、次のものがある。
Toshimitsu Hasumi: *Élaboration philosophique de la pensée du zen*. Paris: La Pensée Universelle, 1973.
その他の諸論文は今わたくしの手もとに見つからないので、引用できないのが残念である。〕

だって外国の大学の哲学科がこんなに分かれている例はありませんよ。哲学の中に倫理学があり、美学があり、中国哲学やインド哲学、宗教学などがあり、みんな分かれている。それらがお互いにお城を築いて、周りにお堀を造ってですね、各々お城にご城主がいて、うっかり近づこうとすると、「寄らば斬るぞ」という態度で、これが学問の進展を阻害している。

これを打破しなければならない。せめて東京大学で何とか少しでもやりたいと思って、仲間の教授、志を同じくする人々とやりかけてみたんですがね、結局、失敗しました——足を引っ張られて。

その時にはこういう比較思想の動きも必要だと思って、三枝充悳教授に特にお願いして講義をしていただいた。そしたら学生たちが大勢集まった。けれど私が辞めたら、それっきりになったと思いますね。じゃあ教養学部の方で比較哲学もなさっているはずだから、ということになりますと、私は事情をよく知りませんけれども、この比較哲学というのを本気になさったのは、創立当時におられた川田熊太郎さん。それから最近では末木剛博教授が非常に独創的な研究を発表されました。これなどまさに比較哲学の名に値すると思うのですね。

〔川田熊太郎博士の論文集は、三枝充悳博士の尽力で京都の法蔵館から刊行された。『川田熊太郎　比較思想研究』1．2．3（法蔵館、昭和六〇年三月）〕

けれど、それ以外、どういう研究が行なわれているのか？　今の世の中で比較研究するからにはグローバルな視点でやらなければならない。比較哲学に関心を持っている方がされたらいいんだけれど、比較哲学ということに関心をもってない人が、ただ教授定員を獲得するために動いて、やったって効果は上がりませんよ。

本日は「自主的な学問を進めよう」ということで、亡くなった先学の功績を追憶しつつ、私の講演を終わらせて頂きます。どうも、ご静聴頂きましてありがとうございました。

（なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学、名誉会長）